

2024 年度企画展

「西南学院の女性宣教師たち —学院の礎を築いた女性たち—」

宮川 由衣

会 期：2024 年 3 月 1 日（金）～ 12 月 20 日（金）

会 場：西南学院百年館（松緑館）1F 企画展示室

主 催：学校法人西南学院

開催概要

1916 年に米国南部バプテスト派の宣教師によって創立された西南学院は、創立以来多くの宣教師の働きに支えられてきた。しかし、2004 年を最後に学院に宣教師が不在となった。その背景には、米国南部バプテスト連盟の信仰が根本主義（ファンダメンタリズム）へ舵を切ったことが挙げられる。同連盟の信仰宣言の改訂は、「女性は牧師にはなれない」「妻は夫に従うべき」など根本主義の極端な聖書解釈の影響を色濃く反映したものであり、宣教師たちはこの信仰宣言に賛同する署名を拒み、その職を辞すことになった。西南学院の発展は女性宣教師の献身とともにあった。

この展覧会では西南学院を支えた女性宣教師の事績に光を当て、今日まで継承される女性宣教師たちの働きを資料とともに振り返る。



2024 年度企画展の展示風景

1. 学院草創期の女性宣教師たち

日本におけるバプテストの伝道の開始は、1860年の米国バプテスト自由伝道協会（以下、「ミッションボード」）から派遣されたジョナサン・ゴープル宣教師夫妻の神奈川到着にさかのぼる。米国南部バプテストは、1859年にジョン Q. A. ローラーとその妻サラを最初の日本派遣宣教師として任命するが、海難事故により日本に到着することはなかった。次の宣教師派遣は1889年のジャック A. ブラソンと妻ソフィア、ジョン W. マッコラムと妻ドルウシラの任命まで待たねばならなかった。

1906年にチャールズ K. ドージャー、ジョン H. ロウ、ジョージ W. ボールデンの3人の宣教師は、その妻モード、マーガレット、マギーを伴って日本に到着し、福岡で新任宣教師として歩み始める。当時宣教師の妻は「補助宣教師」と位置づけられ、その働きを限定されていた。こうした中、女性たちの働きにより幼児教育の礎が築かれる。1916年にドージャーが中心となって男子中学校として西南学院を創立すると、女性の宣教師たちが教師として招かれ、学院草創期の発展を支えた。



中学部で教壇に立つシエル
1920年頃／西南学院史資料センター所蔵

(1) 舞鶴幼稚園の園長を務めた女性宣教師たち

現在とは違い、当時宣教師の妻は「補助宣教師 (assistant missionary)」と位置づけられ、伝道活動の中心的な役割を担う夫を支え、家事を切り盛りすることに、その働きを限定されていた。また、伝道対象も女性に限定されていた。そこで彼女たちは、1911年に開校した福岡バプテスト夜学校が使用していない昼間を利用して、西洋料理や英語の講習会を行った。宣教の一環として週2回開かれた講習会には40～50人の女性が参加した。そのなかで女性宣教師たちは、新しい社会にふさわしいキリスト教による幼児教育への強い期待があることを知り、それが舞鶴幼稚園の創設へとつな



グレース H. ミルズ
Grace Hughes Mills
園長在任期間 1913-16



モード B. ドージャー
Maude Burke Dozier
園長在任期間 1916-17,
1926. 2-9



キャリー H. チャイルズ
Carrie Hooker Chiles
園長在任期間 1917-20



サラ F. フルジウム
Sarah Frances Fulghum
園長在任期間 1920-26



マギー A. L. ボールデン
Maggie Alice Lee Bouldin
園長在任期間 1926-33



近隣の女性を集め、モード（前列中央白いドレス姿）が始めた料理教室。2列目左から3番目は舞鶴幼稚園初代園長ミルズ
1912年頃／西南学院史資料センター所蔵



荒戸園舎での保育風景。この当時に恩物（積木）を使っていたことは画期的であった。
1915年／西南学院史資料センター所蔵

がっていく。

バプテスト宣教団は、福岡市近郊の筑紫郡千代町（現在の博多区千代）での伝道活動、日曜学校を開始するにあたり、1911年に幼稚園を開設した。その責任者となったのがグレース H. ミルズであった。幼稚園には16人の園児が集まり、女性のための集会も開かれ、出席者も増えていった。1913年の前半までこの幼稚園は続けられたが、資金不足のため西公園下に移転し、これが舞鶴幼稚園設立の基礎となった。

ミルズを中心とした女性宣教師たちは、ミッションボードの支援のもと、幼稚園設立のための組織化を進め、1913年11月6日に福岡県に舞鶴幼稚園の設立認可申請書を提出した。舞鶴幼稚園では、今日まで、申請書を提出した日を公式の創立記念日としており、1916年創立の西南学院より3年早い創立となっている。

初代園長には申請書の設立名義人となっていたミルズが就任し、開設当初は、園長ミルズの他、3人の日本人保育者が17人の園児の保育に当たった。1916年、ミルズは夫の長崎への転任に伴い福岡を去ることになり、園長職は創設と運営に初期から参加していたモードに引き継がれた。

創設初期約20年の歴代園長たちは全て女性宣教師であった。第3代園長のチャイルズは米国で幼児教育の専門教育を受け、日本において幼児教育を推進するために派遣された最初の独身女性宣教師であった。また、第4代園長のフルジュムは、ソプラノの音楽家でもあり、西南学院のグリーククラブの生みの親となるなど音楽的な影響も与えた。

(2) 中学部・高等学部の教員として学院を支えた女性宣教師たち

西南学院は1916年4月に生徒104人の男子中学校として発足した。1918年1月に学院は大名町から現在の西新町へ移転し、1921年3月には赤レンガ本館（現・大学博物館）が完成する。1920年5月には中学部校地の西に高等学部の用地として土地を購入、1921年4月に高等学部が開設され、53人（文科16人、商科37人）が入学した。そこでは女性の宣教師が教員として活躍した。高等学部では文科だけでなく、商科でも英語教育が重視され、これが「語学の西南」と言われる所以となった。

ナオミ E. シェルは1917年から5年間、コンラッドは1921年から8年間、学院で教えた。1921年から32年まで学院で音楽、英語、聖書を教えた E. E. ベーカーは水町義夫（1885-1967、後の第4代院長）作詞の校歌を英訳した。1929年にはエリザベス T. ワトキンスが、そして1938年には戦後も長きにわたって大学の教員を務めるアルマ O. グレーヴスが着任し、日米開戦後にやむなく帰国するまで学院を支えた。



ナオミ E. シェル
Naomi Elizabeth Schell
学院在職期間 1917-22



F. コンラッド
Florence Conrad
学院在職期間 1921-29



E. E. ベーカー
Effie Evelene Baker
学院在職期間 1921-32



E. T. ワトキンス
Elizabeth Taylor Watkins
学院在職期間 1929-41



アルマ O. グレーヴス
Alma O'Norean Graves
学院在職期間 1938-40,
1947-76



ベーカー（前列右から 2 番目）と
ワトキンス（同 3 番目）と中学部生徒たち
1930 年頃／西南学院史資料センター所蔵



高等学部教員たち。
前列左端にコンラッド、左から 2 番目にベーカー、
3 番目にモード
1925 年／西南学院史資料センター所蔵

2. 学院の発展と女性宣教師たち

ドージャーが1933年に54歳の若さで早世した後も、妻モードは福岡にとどまり、女子教育と幼児教育に尽力し、「マザー・ドージャー」と慕われた。モードは1940年に本学人間科学部児童教育学科の前身である西南保姆学院を設立した。

戦争によって疲弊していた学院の復興・再建の大きな原動力となったのが、宣教師たちの貢献であった。女性の宣教師たちも英語教育、バイブルクラス、そしてクラブ活動を通じて学生と交流しながら、学院の発展に尽力した。

ミッションボードの日本への戦後の宣教活動は、モードの息子エドウィン B. ドージャーによって再開される。学院はエドウィンを通して、教授陣の充実のため、米国に有能な人材の派遣を要請していたところ、1947年7月に、その第一陣としてグレーヴスとタッカー・キャラウェイの2人の宣教師が着任することになった。グレーヴスは1938年から40年まで学院で教壇に立ったこともあり、戦後いち早く来日し、1976年までの長きにわたって大学文学部で教え、E. S. S. でシェイクスピア英語劇の指導に情熱を傾けた。



学院創立35周年に際し再来日したモード B. ドージャーの
児童教育科（鳥飼校舎）での歓迎式
1951年／西南学院史資料センター所蔵

(1) モード B. ドージャー

—女子教育と幼児教育に尽力し、「マザー・ドージャー」と慕われた

1916年に舞鶴幼稚園の初代園長ミルズが宣教師の夫の長崎への転任に伴い福岡を去ることになり、園長職は創設と運営に初期から参加していたモードに引き継がれた。チャールズ K. ドージャーが1933年に54歳の若さで早世した後も、モードは福岡にとどまり、幼児教育のために尽力する。モードは常に保育士養成機関の設立に心を向け、キリストに従って生きる保育士を養成することが宣教師の一つの務めであると考



西南保姆学院第1回入学式
後列中央がモード
1940年／西南学院史資料センター所蔵



西日本新聞社から第20回西日本文化賞を贈られたモード
1961年／西南学院史資料センター所蔵

えていた。そして、北九州小倉の西南女学院で彼女の理念を具体化しようとする。1939年にその考えは西南女学院の理事会で承認され、1940年に聖書科と児童教育科の2学科からなる女子の専門教育の学校を設立することが決まった。しかし、戦時下に米国宣教師が北九州一帯を見渡せる小倉の高台に新たに校舎を建設することは、国防上の理由から承認されなかった。頓挫したモードの構想は、福岡の地で実を結ぶ。1940年4月の開設を目指して鳥飼の地に校舎建設敷地を確保し、名称を「西南保姆学院」として設立を申請し、1940年4月5日に認可され、同4月11日に第1回入学式が行われた。

戦時下、日米関係の悪化により、在日の米国人宣教師の引き揚げが始まり、モードは息子のエドウィン一家とともに1941年に帰米し、ハワイで日系人のために働いた。戦争が終わる前に、モードは宣教師としての引退を迎えるが、戦後、1951年に再来日する。1961年11月には、女子教育と幼児教育に対する長年の貢献が認められ、西日本新聞社から第20回西日本文化賞を贈られた。また、1967年には勲五等に叙せられ、宝冠章を授与された。女性宣教師として、モードが献身的にその発展を支えた女子教育と幼児教育は、今日まで西南学院で受け継がれている。

(2) アルマ O. グレーヴス

—「語学の西南」の立役者となった女性宣教師

約40年の長きにわたり学院の英語教育のために尽力したアルマ O. グレーヴスは、「語学の西南」に多大な貢献を果たした。

米国南部のルイジアナ州で生まれたグレーヴスは、大学で英語の古典を専攻し、1936年、29歳の時に米国南部バプテスト連盟の宣教師として初めて来日した。2年

間の日本語学習の後、1938年に西南学院高等学部の教授として着任し、1923年に発足したE. S. S.の顧問となり、専門であったシェイクスピアの作品を取り上げて熱心に指導した。戦時中の一時帰国を経て、戦後間もなく再来日し、1949年の新制大学の開設後は本格的に英語劇の指導に取り組み、1950年頃から毎年のようにシェイクスピアの作品が上演されるようになった。『ヴェニスの商人』『マクベス』『オセロ』など年1回の公演を重ね、グレーヴスが1976年に定年退職で学院を離れるまで、通算25回のシェイクスピアの英語劇が行われた。グレーヴスは、英語の発音の指導に加え、演出から大道具、小道具に至るまで目を配った。

グレーヴスは日本語が堪能であったが、学内では英語で通したといい、英語で話しかけられたことは、当時の学生の思い出話によく登場する。1951年には県内の高校生を対象に英語暗唱大会として（その後対象を大学生へ変更）、E. S. S.主催のギャロト杯争奪英語弁論大会を始めた。校歌とともに歌われる、カレッジソング「Ah, Seinan !」と「She Wants Brave, Noble Men」は、1951年にグリーククラブの要請を受けてグレーヴスが作詞したものである。グレーヴスは詩の方面にも才能を発揮し、多くの詩を書き遺した。また、学外においても生け花を愛し、生け花を通して国際交流を深めることを目的とする「生け花インターナショナル」の福岡支部を立ち上げ、日本文化に興味を持つ米軍基地内の将校夫人や宣教師夫人などに広めた。



グレーヴスと女子学生たち
撮影年不詳／西南学院史資料センター所蔵



E.S.S.の学生とグレーヴス（後列左から5番目）
1958年／西南学院史資料センター所蔵

3. 女性宣教師たちの現在地

米国南部バプテスト連盟は、2000年、バプテストの信仰と使信（Baptist Faith and Message）と呼ばれる信仰宣言（以下「信仰宣言」）を改訂した。その内容は、「女性は牧師にはなれない」「妻は夫に従うべき」など根本主義の極端な聖書解釈の影響

を色濃く反映したものであった。同連盟は、2002年、この信仰宣言に賛同する署名を各宣教師に強要したが、西南学院で働く宣教師および福岡市在住の宣教師全員がこの署名を拒否した。署名を拒むことは国際宣教局（International Mission Board）からの解雇を意味した。学院は所属していた5人の宣教師のうち定年を控えていた2人を除く3人を専任教員として採用した。これによって1916年の創立以来、79人を超える宣教師によって連綿と続けられてきた教育活動と伝道活動は終止符を打ち、学院から宣教師が姿を消した。専任教員として採用された宣教師のうち、K. J. シャフナーは2014年に本学最初の女性の学長となる。また、リディア・ハンキンスは学院の専任宗教主事となり、チャペルをはじめとする本学のキリスト教活動を支えた。

米国南部バプテスト連盟の政策変更に伴い、2004年以降、宣教師が学院に任命・派遣される可能性がほとんどなくなった。同年4月、元院長L. K. シートにより、米国ミズーリ州リパティエーを拠点として、短期宣教師の派遣を目的とした「西南学院4-L財団」（後述）が設立され、大学バイブルクラスの指導者、中学校・高等学校の非常勤講師などの働きを担っている。



宣教師記念碑を囲んで記念撮影を行う最後の宣教師
左からシート、ハンキンス夫妻、パークレー、ジョンソン夫妻、シャフナー
2008年／西南学院史資料センター所蔵

(1) 南部バプテスト連盟の変質

米国南部バプテスト連盟は、1920年代にプロテスタント教会の間で起こったダーウインの「進化論」をめぐる論争をきっかけとして、1925年に科学に対する聖書の権威・優位性を信じる信仰的立場を「信仰宣言」によって表明した。これは南部バプテスト連盟が共有する信仰理解を確認するものであり、教会や個人の信仰に対して拘束力をもつものではなかったが、1960年代に旧約聖書の創世記に関する解釈をめぐっ

て論争が起こり、聖書の一字一句に誤りがないとする主張が強まり、根本主義が主流となった。1979年に根本主義者の理事長が選出されると、「信仰宣言」は信条化された。それに伴い、根本主義的ではないと判断された神学校教員や連盟職員が辞任させられ、代わって根本主義派の意図に賛同する者たちが採用されるようになる。根本主義化の波は国際宣教局にも及んだ。

これまで、宣教師の伝道活動は多様であり、宣教師たちは教会や学校、病院などの施設で奉仕した。しかし、国際宣教局は開拓伝道に専念すべきであると方針転換し、学校や病院に宣教師を派遣しないことを明確にした。

(2) 信仰宣言の改訂と宣教師の辞任

2000年に米国南部バプテスト連盟は信仰宣言を改訂する。その内容は、「信仰の中心は聖書が証するイエス・キリストよりも一字一句誤りのない聖書の記述そのものである」「女性は牧師にはなれない」「妻は夫に従うべき」などであった。また、国際宣教局によるトップダウンの支配体制が強化された。2002年には、この信仰宣言に賛同する署名を各宣教師に強要した。西南学院で働く宣教師および福岡市在住の宣教師全員がこの署名を拒否した。署名を拒むことは国際宣教局からの解雇を意味し、2004年に学院には宣教師が不在となった。2008年には学院のために奉仕した宣教師たちを記念する碑が設置された。

学院は所属していた5人の宣教師のうち、G. W. バークレー、D. A. ジョンソン、K. J. シャフナーの3人を専任教員として採用する。シャフナーは2014年に本学最初の女性の学長となる。一方、H. C. ジョンソンおよびL. K. シートは、宣教団の定年延長が認められず、退職させられた。また、リディア・ハンキンスは学院の専任宗教主事となり、チャペルをはじめとする本学のキリスト教活動を支えた。



宣教師記念碑
旧西南学院本館（現・大学博物館）西側

(3) 西南学院 4-L 財団の設立

米国南部バプテスト連盟の政策の変更に伴い、2004年以降、宣教師が学院に任命・派遣される可能性がほとんどなくなった。同年4月、元院長L. K. シートは、米国ミズーリ州リパティエを拠点として、短期宣教師の派遣を目的とした「西南学院 4-L 財団」を設立した。「4-L」はシートが院長時代に学院の建学の精神「西南よ、キリストに忠実なれ」を説明するにあたってよく用いた4つの英単語、すなわちLife（生命）、Love（聖愛）、Light（光明）、Liberty（自由）の頭文字に由来する。

本財団は、学院の使命達成を援助することを目的とし、日本の法律の認定を受けた非営利教育事業団体である。4-L 財団は当初、大学に教員を派遣しようと意図したが、設立後4年ほどでは実現することはできず、2009年に中学校・高等学校の英語講師と学院の宗教主事の助手としてジョナサン R. ランダースを最初の短期宣教師として派遣した。同財団は、大学バイブルクラスの指導者、中学校・高等学校の非常勤講師などの働きを担っている。

補遺

西南学院史資料センターでは2020年度に企画展『西南学院を支えた79人の宣教師たち』を開催した。そこで展示した2003年7月19日付『キリスト新聞』掲載のハンキンス夫妻による公的書簡が今回の企画展の出発点であった。2000年に発表された米国南部バプテスト連盟の信仰宣言の改訂は「女性は牧師にはなれない」「妻は夫に従うべき」など根本主義の極端な聖書解釈の影響を色濃く反映したものであった。ハンキンス夫妻を含む西南学院で働く宣教師全員が、これに賛同する署名を拒否したため、宣教師としての職を解かれた。この公的書簡にはこの出来事を受けてのハンキンス夫妻の思いと、米国南部バプテスト連盟への批判が記されている。そこでは改訂された宣言が家庭における妻と夫の性役割を固定化し、性差別によって伝道の働きを制限し、「女性の人生に働くキリストの解放の力にとって、世代的逆行」となっていると指摘されている。

創立以来、西南学院は多くの女性の宣教師たちの働きに支えられてきた。創立者チャールズ K. ドージャーが早世した後も福岡にとどまり、特に女子教育と幼児教育の発展に尽力したモードは「創立者ドージャーの妻」としてではなく、ドージャーと並び、学院の発展に貢献した重要な教育者として記憶されるべきであろう。また、戦前から多くの女性の宣教師たちが学院における英語教育の根幹を担ってきた。信仰宣言の改訂により女性の宣教師の働きが制限され、学院から宣教師が不在となって20年経った今日、学院の歴史における女性の宣教師たちの活躍に光を当て、あらため

てその働きの意義を問うことが本展示の目的であった。本展示で紹介した女性の宣教師の中には、現存する資料が少なく、これまで年史等でほとんど取り上げられることのなかった宣教師も少なくない。こうした宣教師に関する資料の収集と研究の継続が学院史資料センターの活動の今後の課題である。2023年5月に開室した西南学院バプテスト資料室は、宣教師に関する資料のアーカイヴと研究の拠点となることが期待されている。

2018年に刊行された日本バプテスト連盟宣教師編『ひらかれる教会—女性の牧師の招聘にむけて』には、今日のバプテスト教会における女性の牧師の実状や課題をめぐる論考のほか、「米国南部バプテスト連盟2000年信仰宣言抜粋」や「日本バプテスト連盟常任理事会による米国南部バプテスト連盟への書簡」といった資料が収録されている。展示室では本書を展示し、閲覧用のブースを設置した。日本バプテスト連盟では、2011年から「和解のつとめに仕える」ことを主題とし、その中で「女性の牧師を招聘する教会を励ます」ことが重要課題の一つとして挙げられた。神学校に進む女性の献身者が増えている一方で、神学校を卒業しても女性の献身者が招聘されることは少ない状況が続いている。本書は、こうした状況を作り出しているのが教会の中にある意識、すなわち、2000年の米国南部バプテスト連盟の信仰宣言に象徴されるような、牧師は男性といった固定化された性役割や特定の聖書理解に基づく性差別であると分析している。

学院史資料センターでは、自校史や建学の精神について学ぶ「西南学院史」をはじめとする大学の授業で学生に対して展示の解説を行なっている。本展示を見学した学生からは「展示を通して、西南学院の女性宣教師たちの先駆的な功績と、彼女たちが学院の礎を築く上で果たした重要な役割がよく理解できた。特に印象的だったのは、厳しい時代背景の中で、女性の高等教育と社会進出を推進した彼女たちの先見性と勇気である」といった感想が寄せられた。自校史教育に関する授業に限らず、学院の教職員に広く呼びかけ、授業等を通じて学生が展示を見る機会を増やしていくことが望まれる。



『キリスト新聞』に掲載されたハンキンス夫妻の公的書簡
2003年7月19日／西南学院史資料センター所蔵